

アジア・太平洋戦争下の時流に対決した 立教大学文学部教授富田彬の論説

山田昭次

解説

一 富田彬の略歴

英米文学研究者で立教大学文学部教授だった富田彬あきひろの諸論説中、ここに選んで紹介する論説は、アジア・太平洋戦争下の国政に迎合する時流を批判し、国家に対する文学の自立性の堅持を訴えた戦時期の論説三篇、すなわち「文学と実践」、「文学の研究」、「文学と教寄」である。彼は一八九七年に宇都宮に生まれた。教師をしていた父の転勤のために富山県の高岡中学校に在学した。さらに四高を経て東京帝国大学文学部英文科に進学し、一九二四年に卒業した。高知県の城東中学校に勤務した後、二六年に東大大学院に進み、同年九月に立教大学文学部

英文学科教授に就任し、四〇年には英文学科長となる。四三年の文学部「閉鎖」のために休職となり、宇都宮の作新学院中等部に勤務した。四六年の文学部再開に伴い四九年に同学部に復帰して英米文学科教授になった。六二年に定年退職した後、七一年に没するまで非常勤講師を務めた。

彼の著書には、『近代英文学雑考』（健文社 三〇年）、『ソーロウ』（研究社英米文学評伝叢書 研究社 三四年）、『米國批評史』（同上 四〇年）『アメリカ国民文学評論』（塙書房 四七年）、『米英文学と日本文学』（續文堂 四八年）などがある。

訳書には、エマソン『エマソン日記抄』（新月社 四八年）ソーロー『市民としての反抗』（岩波文庫 四九

年)、オーステイン『高慢と偏見』上・下(同上 五〇年)、ソーロー『森の生活(ウォールデン)』(角川文庫 五三年)、ウルフ『ドロウエイ夫人』(同上 五五年)、メルヴィル『白鯨』上・中・下(同上 五六年)、エマソン『エマソンの日記』(有信堂 六〇年)、その他がある。

二 ここに収めた論説について

富田が政治によって文学が左右されてはならないことをはじめ主張したのは、四一年五月六日付『立教大学新聞』に発表した「文学と実践」であった。彼は、日中戦争の進展のために日英関係が悪化して行く状況のなかでも「英語英文学をやっていることが、損か得かなどという事は、考える暇もない」と言い切り、世界を内側でなく、外側から現象的に捕らえようとする人は「人間的価値よりもマーケット・ヴァリューを重んずる人」だと、自己自身を持たずに目前の時流に流されることを拒否し、「文学は直接の救済を意図しない。(中略)それは幾世紀かを隔てて万人の心に徹し、政治を動かし現実を変えていく」と、文学に徹することによって現実を根底から変えることを自己の使命とした。

四二年五月二六日、内閣情報局の画策によって文学者を「国策」に動員するために日本文学報国会が発足した。

会長は徳富蘇峰、初代事務局長は久米正雄だった。会員は約三千名に達した。

富田は四三年六月に発表した「文学と数寄」でこの風潮を厳しく批判して、「文学は、直接何かの役に立とうとする時に墮落し始める。(中略)心の最も深いところで行われる創造の営為が、何で当座の有用を目的となし得よう。(中略)文学報国とは筆で食う商売を時局向きに生かすことではない」と、政治に対する文学者の迎合を批判した。

四二年八月に発表した「文学の研究」では、「この非常時に文学のことだけ考えているのは我儘勝手で個人主義のやり方だ」という考えを拒否した。なぜなら「文学の道は人間の道の上に立っている」と考えるからだ。彼は三八年五月に発表した論説「世俗の眼・文学の眼」で「作品を読むことの中に文学者の生活が在り、そして文学者の生活は作品の上の真実を生かすことに他ならない」と言った(『米英文学と日本文学』續文堂 四八年)。つまり、富田は政治が「非常時」と称して文学を従属させる状況を到底容認できなかった。そのような状況であるからこそ、文学作品の中に真実を見出し、それを現実の生活に生かして行く実践的な課題の遂行が一層切実になったのである。富田は「文学と実践」で「状態は、むしろ私自身の覚悟に依って動かされ得る可能性を含ん

だもの」と言った。つまり彼は、人は時流から自立することによって歴史を動かす主体になりうるを見ていたのである。だからこそ「文学の道は人間の道の上に立っている」と強く主張して、文学を「非常時」に譲ることを拒否したのであろう。

立教学院の全般的な思想的状況も社会一般の動向と同じく戦争への協力に走っていた。しかしその中には沈黙によって戦争協力を回避したタイプの人々もいた。例えば、予科教授で文学部史学科教授を兼任していたドイツ専攻の島田雄次郎は、四三年四月に陸軍から召集令状を受け取った時に、妻に「『万歳』なんかいらぬよ」と言い、上野駅に見送りに来た人々が「万歳、万歳」と言う声を聞いて苦笑した（島田芳子「立教時代の島田雄次郎」、立教大学史学会編・刊『立教大学史学会小史』七二年）。戦時下の状況に言及した彼の文章は見当たらない。戦争を肯定できず、沈黙していたのであろう。

このような教員すらも少数派であるのに、文学の分野に限られたとはいえ、戦争への迎合の風潮を公然と批判した富田は稀有な例に属する。しかし戦時下の時流に抗することは容易ではなかったであろう。彼は「文学の研究」で、「所詮夷狄鳥獣の中では、真の詩人はハムレットの如く気違いを装うか、ドンキホーテの如く愚弄され通すかするより他ないのである。その孤独に耐えること

が必要なのだ」と言ったが、これは多くの文学者たちが戦時下の時流に滔々と流されて行く中でこれに抗して自立性を堅持している富田の孤独な心境を語ったものであろう。

彼はまた「文学と数寄」では「日本の伝統精神の美が、世界に向って桜花の華やかさを開花させるためには、国家は一人の作家に向って筆を握って瞑目するの覚悟を要求するであろう」と述べた。つまり、彼は作家が文学を政治に従属させようとする国家と対決して文学の文学たる所以を貫くには国家による死をも覚悟する必要があると見た。彼は多数派が戦争下の政治に迎合する状況の中の孤独感に耐えて国家と対決し、文学の自立性を貫徹することの容易ではないことを警告したのである。

富田が時流に流されずに自立していた姿勢は戦時期にとどまらず、敗戦後も変わらなかった。敗戦直後の四五年一二月に発表した「現実をみつめて」では、彼は敗戦を迎えると「口を開けば軍閥を攻撃し戦争責任を問う」風潮を「それはそれで当然の事」と認めた上で、「さらに一段と掘り下げた倫理的問題として考える時、ふり返るべき青春の思出を持つ程の年配の者は、必ず自責の念を持つのが当然のように考えられる」と言った。なぜか。それは「今日の事態を引きおこすべき萌芽が育まれていたのではあるまいかと疑われる」時期に「それを知

らずにうかうかと暮らしていた私達の責任」を反省したからである。(『米英文学と日本文学』續文堂 四八年)。

この論説は紙面の制約のためにここに掲載できなかったが、重要な意味をもつ。彼は戦時下に国家とこれに迎合する多数派の文学者たちに厳しく対決したにも拘らず、上記のように戦争への道をその萌芽の時期に阻止することが出来なかった自分たち戦前世代の責任を謙虚に反省したのである。時流が右旋回しようが、左旋回しようが、それに振り回されない富田の極めて深い内面性がここに見られる。この深い内面性が文学をいささかも政治に譲るまいとする精神を支えたのであろう。

もちろん私は彼の思想が完璧だったとは言わない。戦後の彼の思想的動向を見ると、一般の日本人と同じくアジアに対する日本の国家や民衆の戦争責任・植民地支配責任意識は全く見られない。天皇制が持つ問題性も彼の問題意識には登場しなかった。しかしそれにもかかわらず富田の思想と生き方は、研究と教育の場である立教学院の構成員が戦争責任や戦後責任についての考えを今後深めて行く上で大切な示唆を与えていると、私は考える。国家に対する自立が求められるのは文学の分野のみではない。それはすべての研究と教育に求められるものである。日本の右旋回が急激に進んでいる今日、立教学院で忘れられた存在になっている富田彬の論説をここに紹介

するの、このような意味からである。

彼の論説の復刻に当って、字体・かなづかいは常用漢字・新かなづかいに改め、明らかかな誤植は改め、難解な漢字にはひらがなのルビをつけ、一部の漢字はひらがなに改めた。例えば、「之」を「これ」と改めた。また読みやすくするために句読点を増やした。

富田彬の論説

文学と実践

文学部新入生に与える言葉を書けというのであるが、そういう立場をとって書くことは、私には苦手だから、普段から考えている二、三のことを書いて読んでもらうことにする。

直接私が関係している英語英文学の方面は今日の時局下に在って、その対象が英米の言葉であり文學であるため、いろいろの意味で、批判の俎上に載せられているであろう。この間も英文学を修めて、今久留米の陸軍士官学校に入っている若い人が、「僕が嘗て属した職業圈内では相当激しい嵐が吹いていることと思います。暇には情勢をお聞かせ願います。」と言ってよこした。このような問いに私が答えることは、直接には英文科に入られた諸君の問いに答え、間接には文科一般の諸君の参考になるのではないかと思う。

そこでこのような問に対して、客観的な情勢を調べて、斯く斯くの次第だと言ったところで、それはこの場合何の答えにもならないであろう。姿勢は絶えず変わって行くものだからという理由からばかりでなく、姿勢は、むしろ私自身の覚悟に依って動かされ得る可能性を含んだものだからである。

一体現実の外に身をおいて、世界を外側から理解しようとする態度は、少なくとも文学の世界では許されぬことである。文学するということは、現実を、現実の中にいて流動的に捕らえる事なのである。むしろ現実の方向を自分の中から導き出すことである。それは存在の解釈ではなく、自ら生き実践すること、生活それ自体の自己顕現でなくてはならない。私はモーロアの「フランス破れたり」というものを読んでいないが、あれを批評した誰かの言葉に、あれはいくつかの事実を集めて作り上げた嘘だというのがあったが、それは恐らく、モーロアが自分の生の中からフランスを捕えないで、頭で祖国を理解しようとしたからなのである。若しそうだとすれば、それは文学者としてこの上ない恥である。文学的な仕事というものは、これと反対に、嘘の事実を集めて真実を作らねばならないのである。生命力が物質を人間化し、虚偽を真実にするのである。文学に依って読者の血液の循環に影響しロレンス流の言い方をすれば、お嬢が汝

シャツを濡らすのである。

私は私の職業圏内で、今どのような嵐が吹いているかを知らない。私はただ私自身を生き、そして与えられた私の職域に於いて働いているだけである。英語英文学をやっていることが、損か得かなどという事は、考える暇もない。自分の生命に関係あるものを、損得で愛したり捨てたりするわけにはいかない。自分の身についた祖国を突っぱなしてそろばんを割り切ることができないのと同じである。私の考えでは、自分の愛するものを、それが語学であろうが文学であろうが女であろうが損得づくで手輕に捨て去ることのできる人は、自分をも極めて手輕に売ることのできる人だと思う。自分自身よりも外側の姿勢に氣をとられる人、精神的なことよりも物質的なことに動かされる人、世界を内側から感ずるよりも、外側から現象的に捕えようとする人、そういう人は人間価値よりもマーケット・ヴァリューを重んずる人で祖国愛というような本質的に人間的価値に関するモラルとは凡そ無縁の人なのである。問題は何を取り扱っているかではない。国文学を取り扱っているから、英語英文学を取り扱っている者よりは愛国心があるというわけには行かない。愛国心などというものは、対象化して数学的に計量できるような生やさしいものではない。それは真に自分を愛する者、自分を外側のもののために売らない者

に於てのみ、本当に美しい花を咲かせる恐ろしく頑固な伝統の樹である。愛国心とか伝統とかいうものは、これを苟且きうじの口にのぼせたり、理屈りくつに使ったりする時には、もう力の半分が失われる無意識の力である。それは処女の如く純潔であり羞みやである。それはただ自分を手懸りとして生きて行く孤独な魂の裏にだけ、生々化育されるものである。

真に自己に生きるということ以外には、祖国にも、また文学にもつながる機縁はないのである。自己なくして何等か外在的なものにつながるということは、烏合の衆の一人となることである。烏合の衆は利によって動く。と云っても、現実の生活の場は利のうえにあるのだから、全々利のうえに動いていない人間のいる筈はない。大衆を治める政治は一応利に立たなければならぬ。真の政治は義に立たなければならぬ。義とは何であるか。熊掌くまじょうの旨きを捨てて自己の所信を貫く二者択一の絶対の場に於て、実現さるる理想である。言わば物好きでありドンキホーテの夢である。最も現実的な政治は非現実的精神に依って支えられているのである。文学は直接の救用を意図しない。それは性急な実用主義の眼には無用の長物としか見えぬ。併しそれは地の塩である。それは幾世紀か隔てて万人の心に徹し、政治を動かし現実を変えて行く。文学とは、そのようなものでなくてはならない。

そして政治は文学を尊敬しなければならない。

ちっと眼を瞑つぶる。五体をかけめぐる血液のぬくみが感じられる。今ここに自分が生きていくということは、容易ならぬ出来事である。この自分という場を別にしては、如何なる問題もないのである。世界構造は、この自分を通して、始めて生きた秩序であり、ダイナミックな生体なのである。自分が動かなければ、日本の歴史は動かないのである。自分が本当に生きなければ、人類は生きないのである。自己の存在は、自己のためにのみ必要なのではない。君が僕を必要としているのだ。日本が僕を必要としているのだ。だから自分が大切なのである。自分を世界の外に立たせた「研究」など、有る筈はないが、有るとしたら、それほど無意義なものはない。頭でっかちや曲学阿世の徒は、そこから出てくるのである。私は、魂の抜けた万巻の書を読むよりは、寧ろ満腔の心情を傾けて親しく語り合う友がほしいと思う。〔立教大学新聞〕
四一年五月六日

文学の研究

「文学」をやる者は文学以外のことは余り考えないでいいのである。文学以外のことは考えねばならぬ時に考えればそれで済むのである。文学をやる者が政治のことや金儲けのことなどを考えるのは邪道である。併し政治

が気になり金儲けがしなくなったら、それも仕方のないことだから、文学をやめてそういう方向へ向っていきばいいと思う。文学が面白くないのに文学を無理にやっている必要など少しもないのである。

何だっけそうだと思うが、殊に文学などは好きでなくては駄目である。無能無才この一筋につながったからこそ芭蕉やシェイクスピアの作品が残ったのである。芭蕉が好きならば芭蕉だけを読んでいい。文学の道は深いところでは共通なのである。もちろん個別的な一面がなければ流派や時代や日本や西洋と言う概念は成立しないのであるが、それは後程の問題である。「山路きてなによりゆかしすみれ草」。ああ、いいなあ！ それでいいのである。そうすると芭蕉の孤独な人の世懐かしい魂、あの一莖の董草にさえ心惹かれる閑寂な心境が、背景たる彼の生活の厳しい現実と共にわびしく美しく我々の心に浮んでくるのである。

芭蕉の生活とか伝記とか時代とか、そんなことは後程の問題である。現実逃避とか遁世だとか、そんなこちたき理論は芭蕉にとってはどうでもいいことなのである。尤もそういう研究をしたい人はやっていいのである。唯芭蕉にとってはどうでもいいことだったということ、彼にはもっと切実な問題があったということだけは忘れなようにしなければならぬ。他人の悲願というものに

不感症なほどに非人間的なことはない。「すべて物の哀も、故ある事も、をかき筋も、広う思いめぐらす方々添うことの、浅からずなるになむありける。」(源氏、「幻」の巻)。人間的な不感症は文学的不感症なのである。源氏にある右の言葉は文学研究の道をも示唆するものである。

この非常時に文学のことだけ考えているのは我儘勝手個人主義のやり方だと思ふ人があるかもしれない。或いはそれじゃ「生活」ができまいという人もあるかもしれない。併しそれは文学というものの本質を知らない人の考えである。文学の道は人間の道の上に立っているのである。文学のことを考えることは、人間の道を考えることなのである。

「西行の和歌における宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの造花にしたがいて四時を友とす。見る処花にあらずという事なし。おもう所月にあらずという事なし。像花にあらずる時は夷狄にひとし。心花にあらずる時は鳥獸に類す。夷狄鳥獸を離れて、真に人間的に生きるということが文学の道なのである。夷狄鳥獸であることが人間の道だと思ったり、「生活」だと考えたたりするから、文学を甘く見るのである。

卑俗を怒る芭蕉の烈々たる高貴な志を知らないで、現

実逃避などと勘違いするのである。所詮夷狄鳥獸の中
では、真の詩人はハムレットの如く気違いを装うか、ド
ンキホーテの如く愚弄され通すかするより他ないのであ
る。その孤独に耐えることが必要なのだ。

(四二年八月、原載不明)

『米英文学と日本文学』續文堂、四八年)

文学と数寄

すでにわれわれは実生活のうえで、歎び悲しみ不満を
感じ怒りうらやみ不安を感じているのに、何故文学のう
えでもう一度それらを味いなおす必要があるのか。自然
の美しさ、生活の労苦、恩愛と別離の真只中に生きなが
ら、生きるということそのことが既に手にあまる大きな
仕事であるのに、何故それを歌い、また歌われたものを
読むひま潰しをしなければならぬのか。人間修行のため
というなら、実生活だけで十分である。実生活の中で動
く心情と働く頭だけで十分である。それなら文学は、生
活の慰安のために必要なのであるうか。娯楽なのである
うか。だが嘗て実生活上の苦悶を詩の一節で癒された人
があったであろうか。ハムレットの母に対するあの憤り
を、惹いては女性一般に対する不信と憎悪を理解したか
らと云って、同じ境遇にある者の苦悩がいくらかでも減
ると考えることができるであろうか。

所詮文学とは徒然なるままのすさびであり、絵空事で
ある。何の「ため」にあるものではなく。ただそれ自身
のためにあるのである。結果として、それが何かの「た
め」になることはあるであろうが、目的はそれ自体以外
にあるのではない。大貳高遠が秀歌一首よませて命めさ
れよと住吉の明神に祈ったというのも、宮内卿が血を吐
いたと言うのも世道人心をどうしようとのことではな
い。西行曰く、「一言読み出でては一体の仏像を造る思
いをなし、一句を思いつづけては秘密の真言を唱うるに
同じ。」しかも、「花をよむとも実には花と思うことなく、
月を詠すれども実には月と思わず。只此の如くして縁に随
い興に随いよみおく処なり。」と。先ず以て何よりも好
きなのである。偏執でありまよいである。非常識である。
夏爐冬扇、衆にさかいて用る所はないのである。男子一
生の仕事とするに足るかどうか考える余裕はないのであ
る。

そして創造とは、斯くの如き八方やぶれの虚を足場に
して、実を行う奇跡を意味するのである。「ただ一つの
方法があるだけです。沈黙考しなさい。あなたに書け
と命ずる根拠をお究めなさい。その根拠があなたの心の
最も深いところで根を張り伸ばしているかどうか吟味し
なさい。書くことを拒まれると死なずにいられないかど
うか、白状してごらんなさい。」とリルケは云う。死ぬ

ほど好きかどうかが文学の第一条件であるというところに、文学の恋愛に似た熱病が見られるのである。

すきは好色であり、そして数寄である。だからあの「好色一代男」が好色一筋につながって浮世を貫いて生きて行く西鶴の頹廢の世界は、稀代のすき心の妄執故に、同じ妄執故に憂世を捨てて捨てかねた西行の漂泊の世界と、表面に見えるほどに隔たりがある訳ではない。好き心を通してこそものあわれはしられるのである。

文学は、直接に何かの役に立とうとする時に墮落し始める。又そういう文学は、文学でないが故に、何の役にも立たないのである。心の最も深いところで行われる創

造の営為が、何で当座の有用を目的となし得よう。日本の伝統精神の美が、世界に向って桜花の華やかさを開花させるためには、国家は一人の作家に向って筆を握って瞑目するの覚悟を要求するであろう。伝統は個人の生命を要求することに依って新しき何ものかを付加するほどに厳しいものである。文学報国とは筆で食う商売を時局向きに生かすことではない。

文学を生きそして文学に死することに依って、結果として日本を世界に顕揚することである。

(四三年六月、原載不明。『米英文学と日本文学』續文章、四八年)